

二〇一五年 センター漢文解説速報

出典は明代の文人政治家程敏政の「狸奴論」。中には「どこかで読んだような話だなあ」と思った人もいたかもしれません。おそらくそれは一九九〇年の東大理科で出題された韓愈の「司徒北平王の家の猫の話」ではないかと思えます。死んだ母猫の子を別の母猫が育てる話で、その話を承けて筆者が「噫、亦た異の大なる者なり」と感心する展開もよく似ています。この過去問を解いたことがある人にとっては、とてもやさしい文章だったと思えます。

文章自体の内容はそれほど難しいものではなく、設問も知識を問うものが多かったので、受験生にとっては比較的くみしやすいものではなかったかと思えます。問3がちよつと新しい傾向の問題でしたが、僕の授業を聞いてきた皆さんにとっては、常に字のはたらきに注意しながら読む習慣がついているので、さほど難しい問題ではなかったと思えます。

【設問解説】

問1 どちらも漢字そのものの意味というよりは、文脈上の意味を問うもの。

(1)「承」には「受け取る・うけたまわる・受け継ぐ・引き受ける」などの意味がある。ここは老猫の乳を「承けた」と言っているのだから、⑤の「受け入れた」が正解。

(2)「適」には「かなう・ゆく・心地よい」などの意味があり、漢文の語法としては「たまたま」と読んで「ちようど・ぴったり」という意味をあらわす。ここは下の「契ふ」との整合性を考えても、③の「ちようど」がふさわしい。

問2 漢文を勉強し始めて最初の一月で覚える基本中の基本の知識。

(ア)は再読文字「将」(まさしくントす)なので、当然④の「且」。(イ)の「自」は「より」で④「従」。

問3 終助詞の読みとはたらきを問う新しい傾向の問題。選択肢はそ

れぞれすべての字について説明しているわけではないので、あきらかに間違つたものから除いて行く消去法がいいだろう。まず(a)はあきらかに「かな」ではなく置き字なので、①②が消える。(b)は「なり」と読めなくもないが、「伝聞」はあきららかにおかしいので③も消える。残るは④と⑤。(d)は「意志」ではないし、(e)も「限定」ではなく「断定」の方がふさわしいので、④が残る。

問4 理由を問われたら、答えは直前か直後にあるというのが基本。ここは直前の「是より」以下の部分。血のつながりのない老猫と子猫が、互いに親子のようになったことを「異なるかな」と言っているのである。よって正解は③。

問5 句形としては「何必く」(何ぞ必ずしもくならんや)であるが、ここは句形よりも文脈から考える方がよからう。馬後の話は、自分の子でない子を慈しみて育てた話であり、最初の老猫の話もまた同様である。そこから考えれば「自分で産んだかどうかが大それたではない」という④が正解となろう。

問6 句形の問題。最初のポイント「A与B」(AとBと)。「人親と子と」で①④⑤に絞れる。意味を考えれば「人の親と子になつて」なので、「の為に」と読む①④はおかしい。さらに「豈独く」は限定の反語で「豈に独りくのみならんや」(どうしてくだけだろうか、いや、くだけではない)なので、②か⑤。よって⑤が正解となる。

問7 この手の随筆的文章の構成は、まず筆者が見聞したエピソードを紹介し、そこから導き出される教訓が記されるのがパターンです。その主題の内容について知りたい時は、そのエピソードの内容を考えてみればいいのです。つまり、最初の猫の話が何を述べているのかを考えていけばいいということです。また、「然らば則ち」以下の結論部分の意味を考えれば、「不慈不孝の者は、古人に恥じるばかりでなく、猫にさえ恥じるものである」というのが、筆者の考えということになる。よって正解は②であることはあきらからず。

【書き下し文】

家に一老狸奴を蓄ふ。將に子を誕まんとす。一女童誤りて之に触れ、而して墮す。日夕鳴鳴然たり。会 両小狸奴を餽る者有り。其の始め、蓋し漠然として相能くせざるなり。老狸奴なる者、従ひて之を撫し、徬徨焉たり、躑躅焉たり。臥すれば則ち之を擁し、行けば則ち之を翊く。其の舐を舐めて、之に食を讓る。両小狸奴なる者も、亦た久しくして相忘るるなり。稍く之に即き、遂に其の乳を承く。是より欣然として以て良に己の母なりと為す。老狸奴なる者も亦た居然として以て良に己が出だすと為す。吁亦た異なるかな。

昔、漢の明德馬后に子無し。顕宗他の人子を取り、命じて之を養はしめて曰はく、「人子何ぞ必ずしも親ら生まんや。但だ愛の至らざるを恨むのみ」と。后遂に心を尽くして撫育し、章帝も亦た恩性天至たり。母子の慈孝、始終緘芥の間無し。狸奴の事、適契ふ有り。然らば則ち世の人親と子と為りて、不慈不孝の者有るは、豈に独り古人に愧づるのみならんや。亦た此の異類に愧づるのみ。

【現代語訳】

わが家で一匹の年老いた猫を飼っていた。その猫が子を産みそうになった。女兒が誤ってその猫に触れて、子猫は死んでしまった。母猫は朝晩ニヤニヤと嘆き悲しんで鳴いていた。たまたま子猫を二匹くれた者があった。始めのうちは思うに無関心な様子でお互いに馴染むことができずにいた。老猫は子猫の後をついて撫でてやり、うろうろしたり足踏みをしたりして、落ち着かない様子だった。子猫が横になれば抱いてやり、歩けば助けてやった。子猫のうぶ毛を舐めてやり、子猫に食べ物を讓ってやった。二匹の子猫もまた時間が経つうちに、老猫に対する警戒心を忘れた。次第に老猫になつて、ついにその乳を飲むようになった。それからというもの、喜んで老猫を本当の母猫と思うようになった。老猫の方もまたやすらかな様子で子猫を自分が産んだ子と思うようになった。ああ、なんとすばらしいことだろう。昔、漢の明德馬皇后には子供がなかった。夫の顕宗（明帝）は他の妃の子を引き取って、馬后に養育させて、「人の子というものは、どうして自分が産んだ子である必要があるか、ただ愛が至らないと恨むだけだ」と言った。后はそこで子供の養育に心を尽くし、子の章帝もまた母親に対する愛情が自然にそなわっていった。馬皇后と章帝母子の慈愛と孝行は、終始わずかな隔たりさえなかった。わが家の猫のことは、たまたまこの話とぴったり合うのである。世の中の親子となつて不慈不孝な者は、古人（馬后）に恥じるばかりではない。この猫にさえ恥じるものだ。

（注）この解説のご利用は自由ですが、著作権は門屋温にあります。無断転載はご遠慮下さい。